幼い難民を考える会 CYRニュース

幼い難民に未来を

NO. 9

●150 東京都渋谷区広尾4-3-1 ●03-499-1226 ●振替口座／東京1－36227

●モン族の一家。この定住難民登録番号をつける日をどんなに待ったか。

キャンプ・レポート

自分の中の難民をみつめて

いいぎり ゆき

タイの難民キャンプで

1979年，カンボジア難民との衝撃的な出合いをきっかけに，いのちへの共感が私たちを結び，小さな連帯が生まれてから，四年目になった。この間に見た，不運にみまわれて難民となった人たちの状況は，私たち自身の生き方についてのたくさんの発見につながっている。

何百万ものいのちが犠牲になったといわれるカンボジアでのできごとは，弱い立場におかれ，いのちを支える条件をつぎつぎと拒まれていった人間がどうなったかを伝える話としては，あまりにも恐しくグロテスクというほかない。当時の収容所には，いのちのもろさ，はかなさを思わずにはいられないできごとがいくらでもあった。また，ひとつの状況をようやく逃れてきた人たちが，人種の差別，階級の差別に根ざす偏見やねたみに動かされて，新たな不幸をうみだすことも珍しくなかった。あの頃，難民になった人たちに私たちがよせた共感は，いまここで人間としてのつながりをもたなくては，将来自分たちの生活もどうなるかわからないという危機への予感があったと思う。一方で平穏な暮しを望みながら，どこかであらそいの種を蒔くような生き方をしている私たちだからである。

人間であること

おとなでさえ生きのびた人は運がよいとされたタイの収容所で，子どもたちは病んでいた。戦場さながらの難民集結地で，あるいはそこまでの長い道のりをくるまで

てやればよかったと悔みながら，弟をまもった小さな姉の毅然とした態度にすっかり圧倒されていた。そして，以前に，やはり抜きさしならない状況におかれた子どもとのいくつかの体験がよみがえってきた。あるときは，砲弾の破片にあたって血を流す少年の妹の気ぜわしい足の運びであった。またあるときは，敵味方もわからない戦闘が始まり，逃げまどう人波をよけて，木のウロに体を隠していた男の子の人を信じきった無防備な笑顔だった。激しい環境の変化をくぐり，なんと子どもたちはしなやかに，そしてしたたかに育ってきたことか。いま，この子らのたくましい生命力に舌をまくことはあっても，また栄養障害が残した数々の不自由に気づくことはあっても，心に残っているかもしれない暗い影を子どもたちに見ることはあまりない。

カンボジアへ帰りたい

思えば，出合いの場が難民収容所だったこともあって，私たちはカンボジアの人たちのふだんの生活がどんなものかをあまり知らない。しかし学校が開かれ，畠が耕やされ，小屋のまわりにパパイヤが実り，鶏が地面をついばむキャンプの光景は，囲われていることを別にすれば，ふつうの村落の暮しである。だが，ここには自活がない。いつ終るかわからない仮の生活である。週に二度，配給物を受ける明け暮れは，もう三年も続いている。外国になにがしかのつながりがある人は，どんどんキャンプから出て行った。だれもが人間らしい生活に戻りたいと思っている。できればカンボジアへ帰りたいと夫は思い，妻は，はたして安全だろうかと膝の子どもを抱えなおす。三人の子どもは病気や食べものがなくみんな死んでしまった。キャンプにきて生まれた末子の，できものだらけの頭に群るハエを追いながら，できればどこかの国へ行って暮したい，と考えこむ。日本でもいいではないか，頼んでみればよいのに。妻は，日本人のもとではたらく夫の顔を見ずに，思いきってそう口にした。日本語はむずかしい。それに知り合いがいない日本は，物はたくさんあっても，お金がとてもかかって生活が苦しい，とみながいう。私だってはたらけばなんとかなるのでは…。それには答えず，また竹を削る仕事を続ける夫に，妻もそれ以上は続けない。だれも自信をもって答えられないのだ。

はじまった日本での暮し

日本人である私たちにも，この人たちが日本へやってくることが幸せなのか，答えは出せない。しかし，難を避けて新しい生活ができる国と選んで，日本にはすでに二千人を越えるインドシナ難民が定住している。だが，昨年10月，総理府がまとめた調査でもわかるように，難民を温かく迎えるのがよいとしながら，なるべくかかわりたくないという本音が私たちの社会にあるのも事実である。難民を助けなくてはと，救援の舞台が外国であればためらわずに心をよせる人がいる。しかしその何割かが，もしほんとうに難民が日本で暮すことに割り切れない思いを抱くのであれば，救援の柱であるべきヒューマニズムの中味はなんだったのかと思う。難民問題がその異常な事態のゆえに，世界中の耳目を集めたとき，日本にも心があると国際社会に意思表示したのは，エゴイズムが裏打ちした慈善だったのか。やはり私たちは，いつでも弱い立場になりうると自覚しながら，現実には自分だけの，自分の家族だけの，日本人だけの連帯にしがみつこうとしているのだろうか。まるで国際社会の難民でもあるかのように。

私たちは異質の文化や生活習慣を，それを育んできた人たちから学ぶことに，つねに関心をもってきた。また異質の文化を吸収するのも得意だった。それは私たちの社会が，異質を同化させ，あるいは共存させ，新しい力を生み出せるだけの文化的成熟を見ているからだとする誇りでもあった。新たに日本の正面玄関から迎えた難民の受け入れの問題を，慈善事業に終らせないためにも，私たちひとりひとりの改革が待たれている。ぎくしゃくとでもよい，とにかく人の心をもって，新しい隣人にあいさつしてみよう。それからさまざまな問題に双方で取り組んでも，決して遅くはない，と思う。

投稿

汝も吾れもおなじ命に生れきて
不幸きわまる汝らが悲し

この世なる命をつなぐクレオン絵
カンボジアの子と老いたるわれと

家二つたがいちがいにかきにけり
タイのキャンプに安らげる子が

秋田県　山本　ちえ

トピックス

定住難民の問題を知ろう

第1回話合いに90名

幼い難民を考える会は，先月19日，日本に定住したカンボジア難民を招き，日本の生活について話をさく会を開いた。集ったのは，東京周辺に住むカンボジア人8家族25名。そのほか外務省難民問題対策室，アジア福祉教育財団・難民事業本部，日本レフュージーズ・インターナショナル，曹洞宗ボランティア会，ヤング・エマウス，一粒会などの代表出席者，CYR会員，一般参加者，および報道関係者をあわせて64名。定住インドシナ難民への関心が身近になっている事実を反映した顔ぶれだった。

この日の集りは，定住した人たちがもつ悩みをわれわれが知り，その原因を探ることのほか，われわれにできることを考えるための試みであった。話し合いは，司会者の箭内祥周さん（日本ビューホテル役員）が，カンボジア青年を採用した立場から話題をすすめ，雇用の問題が打ち出された。具体例は，ことばや生活習慣の違いに不安を抱きながらも，双方の努力が実って順調に職場への適応ができたケースである。つぎに，カンボジア人留学生として日本滞在が長い，サム・フイさんがまだ日本語で自由に話のできない定住者から出されていた意見を，つぎのように説明した。まず，雇用条件をめぐって，雇用主と雇用者との間に，理解できていない内容を残したまま，採用決定にもち込まれる場合がよくあること。仕事の内容については，わからないことが多くても，うやむやのうちに働き始めるので，雇用者の方に不安が大きくなり，不満になりやすいこと。生活習慣の違いからおこる誤解，行政制度が理解できないことからおこる不信感など，が指摘された。これを受けて，就職の斡旋をする立場から，難民事業本部の松本基子さんが，インドシナ難民が入国後，定住センターを経て地域社会に定住するまでの指導の中味を説明。さらに，雇用問題の実態といくつかの具体例をあげて問題を浮き彫りにした。そして国内の住宅状況，専門職の資格制度，就職難の実態など，職選びの際の限界を就職希望者はもっと現実的にうけとめるべきだと訴えた。

このあと，出席者のひとり花崎みさをさん（一粒会）が，二年前からベトナム，ラオス難民の子どもを里子としている立場から発言した。花崎さんは，育つ子どもにとって里親は，他人であってしかもよき援助者であるべきではないかと語り，出席者の共感を集めた。

定住難民をめぐるこの日の話し合い，今後われわれがどのように難民の受け入れを課題とするかの出発点にたったといえるのではないだろうか。

私の意見

ていねいな説明がカギ

——話し合いをきいて——

高橋あつ子／編集部

私たちにとって，生活や福祉に必要な行政制度を利用することは，大変気をつかうものである。老後の経済的心配をしつつ生活している私たち同様，定住とはいえ，日本人でない難民の不安は，はかり知れないものだろう。ことばに不自由しているものにとっては，相談すれば簡単に解決することでも，ことばに頼れないものには，すべてが心配の種となる。なかでも，生活の基盤である就職は，誰にとっても大切な問題である。不安であるだけに，条件の良い職を得たいと望むのは，当然のことではないだろうか。そのためにおきる転職の問題が，懇談会でも大きな問題の一つになっていた。この問題では，つぎのことなどを考慮して，感情的な行き違いにならぬよう注意することが大切だと思った。

まず，気候や風土が異なる生活環境での習慣の違いがある。時計を持つ人が少ない中での，近い・遠い 早い・遅いの時間的観念の違いがある。国により異なると思われるが，雇用が成立した際，約束以外の仕事はしないという，私たちには馴じみ薄い契約社会の考え方も考慮しないわけにはいかない。こうしたずれから生じるさまざまな行き違いを，日本的尺度でのみ計らぬよう長い目で見つめたいものである。また，日本にきた人たちに，今の日本を理解してもらうためにも，丁寧な説明を繰り返す努力を惜しんではならないだろう。行政側の限られた人数では，身近な問題の解決のために時間的余裕はあまりないかもしれない。私たちも，会員に働きかけ，身近にいる難民の人たちと一緒に，その解決のお手伝いをしたいと思う。

カンボジアとの出会い

アンケ ヴィガント

§私とカンボジア

高校生だった頃の1950年代，私にとって「カンボジア」は，せいぜいフランスの植民地史に出てくる国でしかなかった。ある日私は，出版されたばかりのアンコール・ワットの写真集を見た。この寺院群は密林に対立する建造物としてあり，ヨーロッパ的解釈をすれば，人間と自然との戦いを表現していた。この本ではアンコールを建てたクメール人は「ナゾに満ちている」とされていた。又，クメール人とカンボジア人のつながりもそこでは否定されていた。しかし写真集には，生きた人間の姿がどこにもみられなかった。この本にあらわれた植民地主義的視点は当時の私にはとくに気にならなかった。写真集から強い印象を受けたとはいえ，後に私はその本のことをすっかり忘れていた。そして10年後の1960年代，ベトナム戦争とシアヌークによるカンボジアに関する記事を目にするようになって突然，私はあの写真集を思い出した。

1966年12月末，自分でも自分の行動にびっくりしながら私は何人かの観光客と一緒に，カンボジアでシェムレアプ行きの便を待って，プノンペン空港に立っていた。やがてあらわれたつぎはぎだらけのソ連製の小さなプロペラ機がわれわれをのせて低く飛びたった。前方に聳える木々を避けながら機体は，大木のつらなる密林をあえぐように昇ってゆく。私はちょっと子どもじみた冒険心に満たされた気分だった。アンコール・ワットのシルエットをはじめて見たのは，ホテル到着の間際だった。

§一人前のこどもたち

翌朝分厚いフランス語の案内書をかかえてアンコール・ワットの中をあちこち回っている時，何人もの子どもたちに出会った。私は，子どもに特に関心があったわけではない。しかし子どもとは，物質面で特に親に依存していて，現実の生活については何もわかっていないものだと信じていた私は，カンボジアにきて私は初めて，自分の誤った偏見に気づいた。私たちが，旅行している間に出会ったのは，寺院の堀などで巨大な水牛に水浴させたり，妹や弟のめんどうをみたり，時には乳飲み児をかかえた8歳位の子どもたちだった。シェムレアプの市場で商いをする子ども。トンレサップ湖で大きな船をあやつる子ども。村の広場や，夜のとばりを降ろしたアンコールの階段にも，踊り子になったり，見物客になったりする子どもたちがいた。中には竹でできた鳴子を，当時はまだ少なかった観光客に売っている子どももいた。取引はカタコトのフランス語か英語だった。ある午後，小さい少年が懐中電灯をもって道案内をしてくれ，見分けにくい彫像をほのかな電灯の明りで見せてくれた。この子がせがむので1から100までの数をドイツ語で教えたこともあった。物売りの子どもたちは外貨で商売をしたし，各国の通貨の価値にもくわしかった。この体験をきっかけに私が知ったのは，生まれながら利口で，エネルギーにあふれ，働くのが好きで，外国語を話す才能さえもっている子どもたちを，われわれの社会はことさら幼稚に仕立て，自立心を養おうとしていない事実であった。今も，あのとき男の子から買った竹の鳴子をもっている。少年は自分で作った笛に，François と彫り込んであると，教えてくれた。最後のsの記号さえ忘れていなかった。彼は自分の仕事に誇りをもっていた。ところが買手のついた鳴子は，彼が手をひいていた幼い妹がしっかりと握って，はなそうとしないのである。もちろん代金だけ払うこともできたが，それでは彼を傷つけたであろう。

二年後，私は両親とともに再びカンボジアを訪れる機会に恵まれた。寺院，密林，子どもたちは変っていなかった。すっかり成長した何人かの子どもたちは私を覚えていてくれた。私も子どもたちにかわってヤミのドル，フラン，マルク等の外貨をホテルでカンボジアの通貨に替えてやったりした。観光客の数は増え，新しい飛行場，ジェット機，昔からあるホテルAuberge des Templesには，ヨーロッパからの団体観光客用のバンガローさえ建っていた。だが，人びとは何かの気配を感じてか落ち着かなかった。やがてアメリカがカンボジア国境を爆撃した。

1983・1・25

みなが生きていてほしい

予定していたつぎのカンボジア訪問はこれで実現できなくなった。François の銘が入った小さな鳴子を手にとるたびに，アンコール・トムの近くの狭い道で，ジャングルを通して緑色に輝く陽をあび，サルや鳥の声，昆虫の羽音を聞きながら立っていた私たち三人の光景が目に浮かんでくる。男の子が，きっぱりした様子で，だが，いたわるように幼い妹の手から鳴子を取りあげた時のことを。

あの子たちが生きていてほしいと，いま心から思う。

懐中電灯を手にした男の子，商売上手な幼いバナナ売り，両替屋の男，それにぶつぶつ言いながら，違反を承知でしめって汚れた小額の紙幣を替えてくれたホテルの両替係，木陰に腰を下ろし，世界について話をしてくれたトランジスターラジオを持った僧侶，将来の計画を語る工業大学の学生，自分の家族や漁師たちの所へ私をつれていってくれたトンレサップの湖上家屋のベトナム人車夫。みなが生きていてほしい。1970年，ここで最初の虐殺があったのである。

（京[redacted]）

ボランティアだより

カンボジア料理をつくる

サルマンてどんな味

津田綏子

カンボジアの人たちがどんなものを食べているのか知りたいと，事務局に出入りするボランティアがあつまって，カンボジア料理の講習会を開きました。

お料理を教えるソワンさんは，おととしタイの難民キャンプから日本にやってきた，40歳のカンボジア女性です。お住いは東京，赤坂にある旧カンボジア大使館宿舎。緑に囲まれた広い敷地には，ナス，カボチャ，キュウリが植えられ，カンボジア料理には欠かせない香草の鉢植が，ベランダを占領していました。

当日のコック長は，以前から日本で暮しているソンさん。生徒は主婦を中心に全部で9名。

❋

さてメニューは，ノムバンチョック，サルマン，それにデザートの三品。ノムバンチョックとは，ゆでた素麺に，鯉のスープ，それにモヤシ，ニンジン，キュウリなどの生野菜をあしらったさっぱりした味の料理。ゆでてすり身にした鯉に，ピーナツや香料を加えたスープは，うす緑色です。サルマンは牛肉の角切りとピーナツに，ケチャップ，ココナツ，唐辛子などを入れて長時間煮込んだものです。カンボジアでは水牛肉を使うそうですが，野菜ぬきのビーフシチューといったところでしょうか。カボチャをくり抜いて卵，砂糖，ココナッツを入れ，くずれないように紐をかけて1時間位蒸したものをひやしたデザートは，和菓子の舌ざわりに，とてもよく似ていました。

赤坂の宿舎に住んでいるカンボジアの方たちは，外出て日本人と付き合うこともあまりなく，ひっそりと暮している人が多いそうです。お料理を通してお互いに何か得るものがあればということで始めたこの集まりは，お料理を習うというより，私たちがごちそうになりに出かけた感じでした。経済的には決して恵まれた生活ではないのに，ソワンさん一家は貴重な生活費の中から五千円，一万円とタイの難民キャンプに住む遠くの友や，病気の友へ送っていると聞きました。押し入れに入りきれない布団を部屋のすみに積み上げた家に私たちを招き，精一杯のもてなしで迎えてくれるソワンさんの姿を見て，私自身あまりにも見える部分を第一とし，見えない部分での思いやりや，やさしさに無神経ではなかったかと思いました。ソンさんはふたりソワンさんは9人の子どもたちのママです。子どもたちは非常におおらかに育てられ，子ども同志が小さい弟妹の世話をしている様子に比べ，塾やお稽古事に通い，過保護に育てられている多くの日本の子どもたちをかわいそうに思いました。

カンボジアの民族音楽を聴きながら，みなで食事中，私は「手やおかねをかけるのではなく，心をかけ，人のためと思わずに自分のためと考えることの大切さ」を思いました。私たちが見えなくなるまで見送ってくださったソワンさんたち。こんどはおにぎりでも食べながら，もっと語り合いたいですね。

活動資金づくりファイルから

この半年も，国の内外より巾広いご支援をいただきました。年頭にあって，活動資金の状態も，ようやく来年度の事業計画に具体性をもたせるところまで，こぎつけました。ご協力くださった方々のお名前は別紙にいたしましたが，とくにつぎの催しもの，出版物などを通じ，大勢の人を介してご支援をいただいていることをご報告いたします。ご協力に力を得て，今後もご期待にそった救援の仕事に徹するよう，努力してまいります。

北九州市　「160人の母のコンサート」 収益金 1,009,074円

箕面市　被昇天学園短期大学　文化祭 600,000円

京都市　京都ゾンタクラブ　バザー収益金 144,500円

東京都　幼い難民を考える会　バザー収益金 920,402円

東京都　梁敏子，手島悠介，こさかしげる，ほるぷ出版「やせっぽちのチア」　印税 500,000円

日本レフュージーズ・インターナショナル，コンサートほか　3,234,400円

成田市　成田ビューホテル　ディナーショー 100,000円

スイス　犬養道子　印税　500,000円

幼い難民を考える会

1982年度事業計画

1982・5・2　総会採択

◇国外の事業

1　タイにあるカンボジア難民キャンプに開設されている保育センターの運営とその活動内容を，より充実させる。難民の自立と生活環境の向上を目的とした活動はつぎのとおり。

- ◉保育者養成
- ◉保育施設運営
- ◉技術研修と製作
  - 織物
  - 洋裁
  - 木工
- ◉識字教育
- ◉図書室

2　タイにある他の難民キャンプで，他団体と協力し，公衆衛生，育児，保育の知識を普及させる。

3　タイ難民キャンプ以外の地域で，幼い難民を考える会が貢献し，活動できる態勢をつくる。

4　キャンプ派遣ボランティアの数を3，4名に保ち，今後は，長期に滞在(最低6ヵ月)できるボランティアを中心に，活動を安定させる。

◇国内の事業

1　難民キャンプでの活動の意義とその成果を伝える。
　CYRニュース
　写真展，講演会の企画と実施

2　活動資金を継続的に募る
　募金，寄付，会費徴収，バザー

3　会員が参加できる企画をたて実施する。
　定住難民との交歓，勉強会

昭和57年度上半期収支報告書
(4月1日－9月30日)
(1バーツ約11円)

		国内 (円)	タイ (バーツ)
収入	前年度繰越	9,409,128	709,208.70
	会費	1,521,356	
	寄付	3,559,916	60,532.83
	補助金	500,000	567,482.50
	受取利息	265,005	36,860.39
	計	15,255,405	1,374,084.30
支出	管理費	1,126,506	
	事業費	5,498,139	609,358.25
	計	6,624,645	609,358.25